

ケアをインプリンティングする幸せ

和田 サヨ子

天使女子短期大学(札幌市)

このたび、助産院を開業して42年という大ベテランの坂田良子先生からご指名をいただき、大変光栄に存じます。さて私は、実習指導で遭遇した1つの出来事を書きたいと思います。

学生の危機体験と 看護ケアへのアプローチ

母性看護学実習がスタートしたある日のことでした。1人の学生が、以前ターミナル期の患者を受け持ち、無力で惨めな自分に直面し、看護への適性を疑い悩んでいたことを私に話しはじめました。その経験はまるで、「どん底にいるように感じる苦しみ」だったようです。

学生が自分の苦しい体験について、こみあげてくるままに泣きながら話した直後、私は祈る思いで「どうかこの学生が立ち直れますように」と願いつつ、共に褥室に向かいました。

その褥室には、だるそうなうめき声をあげ、分娩室から帰室直後で強い疲労状況の褥婦さんが入室していました。私は、即座にバックケア(温度60~70度のお湯で厚めのタオルを使い背部をマッサージする)を提案しました。以下は、学生のレポートを引用します。

学生の体験レポート

「今日は、実習中に和田先生に面接してもらって、泣いたりして、調子が悪かったというか精神的に落ち込んだ状態だった。和田先生に『やってみたら』と言われたことをその通りすることしかで

きなかった。しかし、その中で私は、初めて『リラックス』した状態を目で見て判断することができた。

私の受け持ちの67号室に入室があって、オリエンテーション後の褥婦さんが1人いた。その人が『腰がだるくて休めそうにない』と言うので、私がマッサージすることになった。私は、マッサージと温罨法を一緒にしていた。褥婦さんは初め『緊張している』とご自分でも言われていた。温めながら脊椎や肩甲骨の周りを指圧し、強めにマッサージを繰り返した。指圧の方法もいろいろ考えながら行なった。私も最初『マッサージぐらいいつでもできる』と思っていたが、意外にもやってみると、強さや方法等を考えさせられたし、工夫できることがわかった。マッサージ1つにこんなに真剣になったことはなかった。

そのうちに私は、褥婦さんの変化に気がついた。呼吸と筋肉の状態がさっきと全然違うのだった。呼吸は最初、不規則だったり弱めで苦痛様のうなり声が混じったりしていたが、少しずつ数が少なくなり深くなっていった。肩だけが動いていたのが、上半身全体がかすかに動く呼吸になった。

次に筋肉が、最初は寝衣の上を私の手がすべるようにマッサージしていたが、少しずつ手の動きと筋肉の動きが同一化してきた。最初の状態をプラスチックの板に寝衣をかぶせている感じに例えたとしたら、変化した後の状態は、お餅の柔らかい所に寝衣をかぶせてこねている感じになった。確実に筋肉がほぐれていることが、触覚と視覚か



ら伝わってきた。そしてこのような状態になってからすぐ褥婦さんは眠りに入った。

● 今まで私は、このようなマッサージや指圧の評価は、患者さんからの『気持ちいいよ』『痛くなくなったよ』という言葉でしか判断できないと思っていた。しかしよく観察すると、看護婦にしかわからない客観的な方法でリラックスしている状態を評価できるのだと思った。

和田先生にバックケアをと言われた私は、そのリラックスの状態がわからなかったため反発さえ覚えていたのに、具体的な自分の気づきでマッサージも創意工夫できる科学的看護であるということがわかった。対象がリラックスした状態を自分の五感で把握でき、今後、看護を行なっていく上でとてもよい経験となった。

● 今回私が最低に落ち込んでいなかったら、このことに気づかなかったのではないだろうかと思う。

自分の進む道がわからず、迷い、知識をどこでどう活用してよいかわからず、『がんじがらめ』になっていた。自分で自分の顔に表情がなくなっていることがわかるほどだった。そういう『無の状態』がこの日であり、私は、『褥婦さんの苦しい所を軽くしてあげたい』という1つの思いだけ(下線筆者)しかなかった。雑念なくその褥婦さんを見ることができたのだと思う。自分の行なったケアの有効性を客観的に評価できた時、何かを超えることができたように感じた。これが看護過程だとわかった。

褥婦さんは、昼食で目覚めた時、『ずっとマッサージしてくれてたんですか?』と言われて、お産でつらかったことや赤ちゃんのことなどをいろいろ話してくれた。これがコミュニケーションだと思った。私が『触れる』というコミュニケーションの信号を出し、それが言葉として褥婦さんから返されたのだと思う。

コミュニケーションは、私から言葉の信号を出さなければ相手からも返ってこないということは、今までも感じてきたことだが、『触れる』ことや態度もコミュニケーションの信号となるのだと思った。

教師冥利に尽きること

私は、この学生と、看護のホスピタリティとアメニティの体験を共有でき、とても嬉しく思っています。彼女の書いたレポートを読みながら、このような体験は、学生にとって鮮烈な印象として刻み込まれることに感動しました。この体験から私は、白い布地とも例えられる学生に対して、ケアをその布地に刻み込むこと、つまり看護の「インプリンティング(刻印づけ)」の意味を自分に見出しました。教師冥利に尽きる思いがし、幸せでした。

* * *

次回は、札幌医科大学保健医療学部看護学科の学科長としてご活躍の、丸山知子先生にバトンタッチしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。